神学校日礼拝説教「あなたの席もご用意します」

日本基督教団石神井教会　2019年10月13日

【使徒書日課】ヤコブの手紙　2章1～9節

1わたしの兄弟たち、栄光に満ちた、わたしたちの主イエス・キリストを信じながら、
人を分け隔てしてはなりません。2あなたがたの集まりに、金の指輪をはめた立派な身な
りの人が入って来、また、汚らしい服装の貧しい人も入って来るとします。3その立派な
身なりの人に特別に目を留めて、「あなたは、こちらの席にお掛けください」と言い、貧
しい人には、「あなたは、そこに立っているか、わたしの足もとに座るかしていなさい」
と言うなら、4あなたがたは、自分たちの中で差別をし、誤った考えに基づいて判断を下
したことになるのではありませんか。
5わたしの愛する兄弟たち、よく聞きなさい。神は世の貧しい人たちをあえて選んで、
信仰に富ませ、御自身を愛する者に約束された国を、受け継ぐ者となさったではありませ
んか。6だが、あなたがたは、貧しい人を辱めた。富んでいる者たちこそ、あなたがたを
ひどい目に遭わせ、裁判所へ引っ張って行くではありませんか。7また彼らこそ、あなた
がたに与えられたあの尊い名を、冒涜しているではないですか。8もしあなたがたが、聖
書に従って、「隣人を自分のように愛しなさい」という最も尊い律法を実行しているのな
ら、それは結構なことです。9しかし、人を分け隔てするなら、あなたがたは罪を犯すこ
とになり、律法によって違犯者と断定されます。

【福音書日課】ルカによる福音書　16章19～31節

19「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮ら
していた。20この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、
21その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、その
できものをなめた。22やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブ
ラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。23そして、金持ちは陰府
でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、
はるかかなたに見えた。24そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんで
ください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わた
しはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』25しかし、アブラハムは言った。『子よ、思
い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に
悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。26それ
ばかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡
ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもできない。』27金
持ちは言った。『父よ、ではお願いです。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。
28わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないよ
うに、よく言い聞かせてください。』29しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たち
にはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』30金持ちは言った。『いいえ、
父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改
めるでしょう。』31アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、
たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』」

予約席にご案内！

「神学校日」には、多くの教会が神学生や神学教師をお招きしてご奉仕いただく礼拝に臨んでいます。わたしたちの教会も、昨年まで三年連続で神学生をお招きしましたが、今年は敢えて、お招きしませんでした。「神学校」や「伝道献身」ということを、皆さんご自身のこととして受けとめていただきたいと考えたからです。とは言え、皆さんに神学校の入学案内をお配りして、「さあ、みんなで神学校に入学しましょう」とお誘いしようというのではありません。一人の信者が伝道献身の決心を与えられて、伝道者として立てられるための学びと訓練を受ける。そして、その学びと訓練を終えて、何処かへと遣わされていく。そのことを、神学生や牧師になる者だけでなく、洗礼を受けたすべての信者が、日々呼びかけられ、応えるべき道として備えられていることを、思い起こしていただきたいと考えているのです。

決して難しいことを要求しようというのではありません。すでに教会へと導かれて来られ、今日も礼拝堂の席を埋めている皆さんに、周りを見渡して空いている席を気にしていただきたい、ということなのです。

どうしてその席は空いているのでしょうか。なぜ埋まっていないのでしょうか。そこには、だれが座るはずだったのでしょうか。席が空いているのならば、どうしてご自分の大切な家族や友を連れて来なかったのでしょうか。

特別な祝祭の日でもないかぎり、どこの教会でも、日曜日の礼拝で満席になることは滅多にありません。いつも満席という教会がないわけではありませんが、それは例外的な教会でしょう。教会の席にはいつも、余裕があるのです。それを、「伝道が奮わないから」と自虐的に見る向きもあるかもしれません。けれども、わたしはいつも聖壇のこちら側から会衆席を見渡させていただく者として、思うのです。その空いた席は、どなたかの予約席なのだ、と。おいでくださることが決まっていて、席もお取りしているのに、今日、おいでいただけていない。その予約済みの方を、皆さんには、探して来ていただきたいのです。見つけて来ていただきたいのです。見失われた羊を、無くした銀貨を、放蕩の息子を、その予約席にご案内させていただけるように、みなさんを、ここから送り出させていただきたいのです。

来週、わたしたちの教会は「在天会員記念礼拝」をいたします。地上の生涯を終えられた先達を覚えて、ご遺族関係者と共に記念の礼拝をいたします。おいでくださるご遺族の中には、信者でない方も多くあります。皆さんも、ご家族皆が信者という方は少ないでしょう。「在天会員記念礼拝」は、信者であったかどうかにかかわらずその家族が共に神の御前に立ち、礼拝にあずかる、貴重な機会なのです。そこで、わたしが皆さんにお考えいただきたいのは、そのような貴重な機会に、信者でないまま逝去されたご家族のことも合わせて思い起こしていただきたい、記念していただきたい、ということです。地上にある信者でない方が共に集うことのできる礼拝であるならば、地上の歩みを終えられた信者でなかった方も共に集うことができる礼拝であるはずだと、言えるはずなのですから。

《良いもの》をもらっている！

何週間か重ねて、主イエスが食事の席でお語りになられた御言葉を、福音書日課として聞いてきました。今日の場面は、その食事の会が、そろそろ終盤を迎えたときのことです。主イエスがお話しくださったことを聞いて、あざ笑う者がいたのです。その食事の会を主宰している家の主人と同じファリサイ派に属する人たちだったようです。ただし、ファリサイ派の人たちが皆、ではありません。その中の一部の人々、金に執着する（16:14）人々が、主イエスの話しを聞いて、あざ笑ったのです。おそらく、主イエスが語られたたとえ話がことごとく、自分の財産を息子や部下に無駄遣いされても平気な顔をしている家の主人、という設定だったからでしょう。

主イエスは、その人たちに向かって、少しばかり厳しい言葉で苦言を呈されてから、今日の箇所のたとえを語られたのです。「金持ちとラザロ」と呼ばれるたとえの物語です。繰り返して語る必要もないほどの物語です。生前、ぜいたくな生活をしていながら、門前で物乞いをする者を助けることもしていなかった金持ちと、その門前で物乞いをしていた者とが、死んだ後、どのようになるのか。物乞いしていた者は天国でアブラハムと共に宴席につき、金持ちのほうは遠く陰府の底に落とされてしまっている。そのようなたとえの物語です。

ヨーロッパの教会の多くが、この「金持ちとラザロ」の場面を描いた彫刻を、聖堂の入口に刻んでいるという話を聞いたことがあります。物の本によると、礼拝にやってくる人々にこの物語を思い起こさせて、「死後、この金持ちのようにならないように、悔い改めて生きなさい」と呼びかけるために刻まれてきたのだと言います。実際、ここに描かれるような死後の世界のイメージを、わたしたちもどこかで聞いたことがあると思います。もっとも、主イエスご自身が、死後の世界をこのようにイメージしていたわけではないかもしれません。主イエスはいつも、聞いている者が想像できるイメージを用いて、たとえを語られましたから、このイメージはむしろ、聴き手のファリサイ派の人々が抱いていたものだと考えられるからです。そうだとしても、主イエスは確かに、このようなたとえをお語りになられたから、このように福音書は伝えているのでしょう。

使徒書日課（ヤコブ２章）が伝えているように、主イエス復活後の教会にあっても、豊かな者と貧しい者との間に厳然と存在する溝が、教会の交わりの中でも暗い影を生じさせていたようです。社会の中で経済的な差が生じるのは、今も昔も変わりません。そして、その差が生活にまで及ぶならば、お互いに別の世界に生きているような感覚になってしまうのも、仕方ないように思えます。けれども、ヤコブに限らず初代教会の使徒たちは繰り返し、「**主イエスを信じながら、人を分け隔てしてはなりません**」と教えたのです。主イエスは決して人を分け隔てされることがなかったからです。その分け隔てを乗り越えていく責任は、貧しい者や弱い者の側によりも、むしろ豊かな者、強い者の側にある。なぜならば、豊かな者や強い者はすでに「**良いもの**」を託されているのだから。そう、使徒たちは、主イエスの教えを思い起こしながら、教えたのです。

「遣わしてください！」

「金持ちとラザロ」のたとえ話を聞くとき、わたしはいつも、これは死んだ後のことではない、と思います。これは、一人の人が死の迫ったときに抱かざるを得ない苦悩なのではないか、と思うのです。

この「金持ち」は、死に臨んで、責め苦に苛まれています。わたしは牧師として多くの方の死期に伴わせていただいてきましたが、少なくない方が、そのときが近いことを自覚されるに従って、何とも言い難い責め苦に苛まれるのです。たとえば、長く関係が途絶えてしまっていたり、仲たがいしてしまっている人のことを、思い出されるのです。この世を生きている限り、わたしたちは、信仰があろうがなかろうが、だれかとの関係が破綻してしまうことはあります。普段は、そういう関係を忘れて過ごしているのです。無かったことにして、平然としているのです。そうしなければ、日々の生活を送れないからです。たとえの中で、「金持ち」が、自分の家の門前にいつも居ながら「物乞いのラザロ」を無視し続けていたのも、そうしなければ耐えられないからと思ったからでしょう。ところが、わたしたちは、そういう関係が壊れてしまった相手のことを、永遠に忘れていられるわけではないようなのです。死期の近いことを悟った人の多くが、そのような相手のことを思い出さないではいられなくなるようなのです。そして、「あの人に会っておかなければ」と、和解を願われながら、最期のときを過ごされるのです。主イエスが語られたこのたとえを、わたしは、そのようなことを考えさせる教えとして聞かないではいられません。「そのような後悔は、死んでからでは遅すぎるかもしれない」のです。

「ラザロをよこしてください」と願う「金持ち」は、自分の「兄弟たち」のことも心残りなのです。彼が「兄弟たち」とどんな関係だったのかは、分かりません。けれども、彼は、その「兄弟たち」のことが心残りで、願うのです、「**ラザロを遣わしてください**」と。

けれども、彼の願いは退けられます。彼の和解は、「ラザロ」任せにはできないのです。「ラザロ」との和解も、「兄弟たち」との和解も、「ラザロ」任せにはできません。彼自身が「ラザロ」のもとに行き、「ラザロ」を招かなければいけない。彼自身が「兄弟たち」のもとに遣わされて行き、「兄弟たち」を和解へと招かなければいけない。そのように、わたしたちもしなければいけないと、主イエスは、お教えなのではないでしょうか。

何とも重い問いかけです。わたしが自らそのような和解へと進み出ることができるでしょうか。和解すべき人のところに、行くことができるでしょうか。

アブラハムに語らせられた主イエスは、しかし、このたとえでまだお語りになられなかったことがあります。主ご自身のことです。死者の中から復活され、御自らモーセと預言者たちの聖書を説き明かしてくださるお方のことです。わたしたちのところに父なる神のもとから遣わされて来られた方のことを、わたしたちは、すでに知らされているのです。和解のための道を拓いてくださったのです。今、わたしたちは、その方の姿を目に焼き付けることから始めるのです。